

● 本会の動き ●

2021 年度部会活動貢献賞 (部会 CT 賞)

The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

[部会 CT 賞表彰にあたって] (河瀬元明 部会 CT 長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術部会として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っています。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与しています。このような部会活動は部会員の皆様の努力によって支えられていますが、特に若手会員の不断の貢献に因るところが大です。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動貢献賞として部会 CT 賞が設けられました。貢献された個人のみならずグループも表彰の対象となります。本年度は12回目の表彰となり、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の3名の方と1グループを受賞者として選定しました。

受賞者の表彰は、2022年3月にオンライン・オンサイト併用開催されました第87年会初日の式典にて行いました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝すると共に、今後も部会をはじめ化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願い申し上げる次第です。

最後に、この度受賞されました方に、心よりお祝いを申し上げます。

エネルギー部会共催の国際会議 (IMPRES2019) における 運営と部会活動活性化への貢献

IMPRES2019 実行委員会

構成メンバー：

辻口拓也 氏 (金沢大学)

大坂侑吾 氏 (金沢大学)

【エネルギー部会】

辻口氏と大坂氏は、化学工学会主催、エネルギー部会共催の国際会議「The Fifth International Symposium on Innovative Materials and Processes in Energy Systems, IMPRES2019」の実行委員として、本会議の運営と成功に多大な貢献をしました。

IMPRES は低炭素社会の実現に向けた革新的エネルギー材料およびプロセスに関する国際会議として2008年に京都で第1回の会

議が開催され、シンガポール、福岡、イタリアでの開催を経て、2019年10月20日～10月23日に第5回の会議 (IMPRES2019) が石川県金沢市で開催されました。本会議の開催に向け、現地では開催の2年ほど前から金沢大学の化学工学会員を主体とする実行委員会を組織して準備を開始し、辻口氏は副実行委員長として、大坂氏は会場総括の実行委員として会議を成功へと導きました。

本会議はエネルギーに関連する研究開発の発表とディスカッションの場として認知され、熱利用技術 (蓄熱、ヒートポンプ)、水素生成・利用技術、蓄電・発電技術、燃料電池、バイオマスといった幅広い分野から、105件の口頭発表と36件のポスター発表が行われました。低炭素社会の実現という共通目標の達成に向け、分野を越えて課題を共有することが本会議の特徴の1つです。この特徴を引き出すにはプログラム編成が重要であり、その役目を辻口氏が担いました。3日間の会期中、全ての参加者が一堂に会する Plenary lecture を午前セッションに組み込むことでエネルギー分野の課題や技術開発動向を俯瞰できるようにし、また分野毎となるパラレルセッションではそれぞれに Keynote speaker を設定し、専門性の高い議論が活発に行われる仕掛けが考えられました。辻口氏が中心となって編成したプログラムに対し、参加者からは、専門分野の最先端動向と同時に、世界的な低炭素社会実現へ向けた課題を違った側面から考えることができたなど、好評でありました。これに加え、会議の運営に際し必要となるアルバイト学生の配置や指導、参加者への連絡窓口などの庶務においても中心的役割を果たしています。

大坂氏は本会議の会場担当として、ポスター会場の設営、備品・物品・飲食物の整備、案内看板の準備などに尽力しました。特に、ポスターセッションでは200名を超える参加者がストレスなく議論を進められるよう、限られたスペースを有効活用したきめ細やかなポスター配置、限られた会期を最大限有効利用するため、ランチボックスを準備し、サンドイッチ片手にポスター前でディスカッションできるように工夫を凝らしました。また、当日の会議では機器のトラブル等の対応を一手に引き受け迅速且つ細やかに対応し、大きな遅延等を起こすことなく円滑な会議進行に大いに貢献しました。物品・飲食物の手配などの業者との折衝も担当しており、本会議の実施に欠かすことのできない業務を数多く担当しました。本会議の成功は大坂氏の裏方的な仕事に支えられていたと言っても過言ではありません。

IMPRES はエネルギー部会の国際交流事業として非常に重要な活動の1つです。一方で、現地実行委員への過度の負担などから次回開催の是非について議論があったことも事実です。しかしながら、本会議の終了後に海外の参加者から次回開催に向けて数多くの好意的な意見が届き、次回開催が決定しました。これは、会期当日に北陸新幹線の不通という大きなアクシデントがあったにもかかわらず、実行委員会の細やかな対応により、IMPRES2019 が成功裏に終わったことの証左です。IMPRES2019 の成功と国際交流事業としての継続は、今後の部会発展に益々寄与するものと

考えます。その基盤は、概ね2年間に亘る本会議の準備と当日の円滑な会議運営であり、これらを精力的に支え、牽引した辻口氏、大坂氏の貢献は極めて大きいものと認められます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：辻口拓也 氏
左：河瀬元明 部会CT長



右：大坂侑吾 氏
左：河瀬元明 部会CT長

有機材料分科会活動および 化学装置材料部会の運営に関する顕著な貢献

梅田 勇 氏(第一高周波工業(株))

【化学装置材料部会】

梅田勇氏は、2014年度から2017年度まで、また2020年度から本年度に至るまでの6年間に亘って部会の庶務担当を務め、2018年度から2019年度の2年間部会の会計担当を務めることで、部会

の活動を地道に支えるという多大な貢献を行いました。更に、2017～2019年度には部会内の有機材料分科会において庶務幹事、2020年度からは同分科会の主査を兼務しています。化学装置材料部会では、実質の活動は分科会が主体で活動しているところですが、ここでも事務的な庶務幹事のみならずリーダーシップを発揮して活躍してきました。

これらの活動の中で、本部行事においては、年会における化学産業技術フォーラムや、秋季大会の部会セッションを開催する際のオーガナイザーを何度も務めました。例えば第86年会の「高経年化した化学装置の余寿命の評価およびその延長」や81年会の「高温環境における化学装置」ではオーガナイザーとして活躍し、産業界の発表をコーディネートしました。第49回、50回、52回秋季大会でもオーガナイザーとして司会や学生と企業との交流などで貢献しています。化学工学誌においては、TOPICSや年鑑の原稿について執筆者との間の庶務業務を引き受けていて、このような面でも貢献しました。部会内の事務的貢献として、役員会や総会の開催準備と運営を行い、また部会名簿の見直しや部会員へのメールマガジン発行を年10回程度行い、これを通して部会の活性化に務めました。

この他、国際的な対外活動として、アメリカに本拠地を置くMTI (Materials Technology Institute Inc., 国際化学企業の主に工務や材料研究を担当したOBが各企業から年に数億円規模の資金を集めて材料研究を行っているグループで、以前より化学装置材料部会と交流を持ってきました。)との協業を部会で行った際には、事務方としてのサポートを担当しました。部会内の各分科会と連携をとり、対外的な公開講演会の開催をしてきました。国際会議の開催ではありませんが、国際的な活躍でも貢献しています。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：梅田 勇 氏
左：河瀬元明 部会CT長

環境部会における部会活動の企画、
運営と活性化への顕著な貢献

松岡光昭 氏(関西大学)

【環境部会】

松岡氏は、環境部会において、2019年度から庶務幹事として会計を担当し、2021年度からは総括幹事として事務局、部会員管理担当を務めてきました。その間、部会の企画、運営、活性化において、以下のような顕著な貢献をしました。

[1]化学工学論文集 特集号 47巻6号「SDGsの達成に向けた環境化学工学の役割」の立案と取りまとめを通じた本学会札幌宣言の推進

松岡氏は環境部会が2021年に企画した化学工学論文集特集号「SDGsの達成に向けた環境化学工学の役割」において、企画立ち上げ段階から庶務幹事として参画し、部会長や総括幹事と共に、内容を立案すると共に、投稿原稿の特集号の取りまとめをしました。本特集号は、厳正なる査読を経て掲載可となった11編の論文(1編のレビューを含む)が47巻6号に掲載され、環境化学工学研究の最先端の研究動向を知るための重要な情報源となるだけでなく、今後のSDGs達成へ向けた環境化学工学のあり方についても示唆を与えることが期待されています。本特集号の取りまとめとして巻頭言の担当や査読者への連絡、会計対応だけでなく、特集号への論文の投稿、投稿された論文の査読においても多大な貢献をしました。松岡氏は、前回の特集号から計3報の論文を投稿しており、今後も環境部会企画の特集号に著者および運営側の両面からの貢献が期待されます。

[2]シンポジウムの活性化と海外とのネットワーク強化

松岡氏は秋季大会の環境部会シンポジウムの円滑な運営と活性化にも貢献してきました。2020年度の第51回秋季大会では会計担当としてだけでなく、オーガナイザーとして環境部会シンポジウムを企画すると共に、座長としてセッションを運営しました。また、第51回秋季大会では優秀学生賞の選考や賞状や副賞の授与も支援し、更に2021年9月に開催された第52回秋季大会では、環境部会シンポジウムの優秀学生発表賞の取りまとめを担い、選考から表彰状や副賞の授与式まで一貫して運営しました。また、同年の第86年会においては、ポスター賞審査ワーキンググループ委員として、学生のポスター発表審査の運営業務に携わると共に、当日のポスター発表の座長も務め、ディスカッションを通じてポスター発表の活性化にも貢献しました。このように学生の研究意欲の向上にも尽力しています。

その一方で松岡氏は、2019年の国際会議 Asian Pacific Confedera-

tion of Chemical Engineering 2019 (APCCHE 2019) では、海外の招待講演者の渡航に関わる事務局作業や座長を担当し、スムーズな運営と活発なディスカッションの結果、招待講演者とのネットワークが強化されました。そして、翌年には、The 4th National Conference on Water Treatment and Reuse of China (ChinaWTR-2020) の国際セッションへの招待講演の選出依頼がありました。同セッションには、環境部会から講師として1名を選出するに至っており、今後も交流を継続することとしております。

今後の環境部会の更なる活性化への貢献が期待されることから、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：松岡光昭 氏
左：河瀬元明 部会CT長

分離プロセス部会の活性化および
部会活動の効率化への顕著な貢献

山木雄大 氏(産業技術総合研究所)

【分離プロセス部会】

山木雄大氏は、分離プロセス部会と、その下部組織である蒸留分科会の運営を通じ、特に分離プロセス部会の活性化と部会活動の効率化に対して、多大なる貢献がありました。山木氏は、部会の役員として、2019年度から2020年度にかけて、分離プロセス部会庶務幹事と蒸留分科会の担当幹事を兼務しました。この間、部会行事の企画・運営をはじめ、部会ニュースレターの発行などを通じ、部会の活性化に尽力しました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のために対面でのイベントや幹事会の開催が難しくなる中で、部会の活動・運営に対してオンライン会議システムを早期に導入し、円滑な部会の活動と運営を促進しました。例えば2020年9月の化学工学会第51回秋季大会における部会ポスターセッションにおいては、オンライン形式での開催へと変更を余儀なくされ

る中でも、発表要旨の記載内容をポスター賞の審査要素に加えるなど、部会独自の審査方法を提案し、ポスターセッションを活性化しました。

部会活動の活性化・会員増強に関する事項として、山木氏は、学生会員の学会活動への参加を増やすことが部会ならびに化学工学会の活性化のために重要であるとの観点から、庶務幹事の任期中に、部会のニュースレターに秋季大会部会ポスター賞を受賞した学生会員のメッセージを掲載しました。これは、部会としては初の試みであり、学生会員から部会員メンバー全体へのメッセージを発信するための貴重な機会を構築しました。この取り組みは、学生の研究に対するモチベーションの向上や、ひいては化学工学会ならびに分離プロセス部会の活性化にも資するものです。また、新型コロナウイルス感染拡大によりイベント開催が延期になり、2020年度の前半における分離プロセス部会の会員数も月単位で減少傾向を示す中で、分離プロセス部会のニュースレターの内容(ページ数)を例年の1.5倍から2倍程度に増やすことに取り組み、積極的な情報発信を推進しました。この効果もあり、2020年度の実績として分離プロセス部会の会員数は後半から増加に転じ、結果的に、年度当初(2020年3月)の577名から年度末(2021年2月)には591名へと正味増加を達成しました。こうした部会員の増強には、山木氏の貢献が多分にあります。

国際会議の運営に関する事項として、同氏の庶務幹事の任期中に開催された、APCCChE 2019 Session 4 "Separation Process", 化学工学会第86年会 国際シンポジウム: K-4 Recent Development of Advanced Materials for Separation Technology, K-6 Recent Progress in Design of Advanced Materials for Membrane Science and Technologyでは、部会のメーリングリストを活用した積極的な広報活動に加え、招待講演者とオーガナイザーの事務サポートをはじめとする裏方の役割を献身的に行いました。

その他、庶務幹事としての貢献に関連する取り組みとして、約600名の部会員に対して、学会や部会の行事をタイムリーに周知すると共に、「分離プロセス基礎講座」、「最新技術講座」、「講演および見学会」などの部会の主催行事の企画にも積極的に関与して、参加者の募集および取りまとめの役割を担いました。また、これらの諸行事に関連する会計業務も主体的に担当しました。

山木氏は、化学工学会において新たに導入が進められたオンライン会計システムについても、分離プロセス部会として早い段階から試用に着手し、本部・部会・分科会の間での調整と改善案の提案を主体的に進めました。更に特定費用準備金の設立にあたって、部会員の教育研究活動に貢献するよう、「分離プロセスに関

する国内外の研究動向を学会会員に情報提供することを目的として、その調査・情報発信を行うための資金」とすることを考案しました。これにより、分離プロセス部会としての情報発信を一層強化できることが期待されます。これらの調整にあたり、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から対面での幹事会の開催が困難になる中で、山木氏はオンライン会議を早期に導入して、部会役員間での意思疎通を円滑に行えるように熱意を持って実務を執り行いました。

上記に加えて、分離プロセス部会の下部組織である蒸留分科会では、2019年度から2020年度に亘り、蒸留分科会の担当幹事を務めました。その間、化工誌の年鑑の執筆など、分科会レベルの広報活動においても、大きな貢献があります。

このように山木氏は、国際会議の運営に関連する事項としてAPCCChE 2019および国際シンポジウムのサポートと調整、活性化・庶務活動・広報活動に慣例する事項としては主催・共催・協賛行事の企画や周知、更には部会ニュースレターの内容充実化と発行業務などを献身的に執り行い、部会の継続的な発展に対して顕著な貢献を発揮しました。更に、今後の部会運営に関わる事項として、オンライン会計システムの導入や特定費用準備金の制定に向けた準備など、部会活動の活性化と効率化を推進するための積極的な取り組みを実践しました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：山木雄大氏
左：河瀬元明 部会CT長

(京都大学 河瀬元明)